

二〇二三年度 樟蔭中学校 入学試験 問題用紙（A入試） 【国語】

二〇二三年一月十四日 実施

解答は解答用紙に記入すること。 「五枚のうち その二」

※特に指定がない限り、句読点・記号は一字として扱う。

一．次の文章は、角田光代「さがしもの」の一節である。これを読み、後の問いに答えよ。

その日から私は病院にいく前に、書店めぐりをして歩いた。繁華街や、隣町や、電車を乗り継いで都心にまで出向いた。いろんな本屋があった。雑然とした本屋、歴史小説の多い本屋、店員のaシンセツな本屋、人のまったく入っていない本屋。しかしそのどこにも、①おばあちゃんのさがす本はなかった。

手ぶらで病院にいくと、おばあちゃんはきまって落胆らくたんした顔をする。 ②何か意地悪をしているような気持ちになってくる。

「あんたがその本を見つけてくれなけりや、死ぬに死ねないよ」

あるときおばあちゃんはそんなことを言った。

「死ぬなんて、そんなこと言わないでよ、縁起でもない」

言いながら、はつとした。私がもしこの本を見つけたさなければ、おばあちゃんは今にもう少し生きるのではないか。ということは、見つからないほうがいいのではないか。

「もしあんたが見つけだすより先にあたしが死んだら、化けて出てやるからね」

③私の考えを読んだように、おばあちゃんは**マガオ**で言った。

「だって本当にないんだよ。新宿にまでいったんだよ。いったいいつの本なのよ」

本が見つかることと、このまま見つけられないことと、どっちがいいんだろう。そう思いながら私は口を尖とがらせた。

「最近の本屋つてのは本当に困ったもんだよね。少し古くなるといい本だろうがすぐひっこめちゃうんだから」

おばあちゃんがそこまで言いかけたとき、母親が病室に入ってきた。おばあちゃんは口をつぐむ。母はポインセチアの鉢を抱えていた。手にしていたそれを、テレビの上に飾り、おばあちゃんに笑いかける。母はあの日から泣いていない。

「もうすぐクリスマスだから、気分だけでもと思って」

母はおばあちゃんのをのぞきこんで言う。

「あんた、知らないのかい、病人に鉢なんか持つてくるもんじゃないんだよ。鉢に根付くように、病人がベッドに寝付いちまう、だから縁起が悪いんだ。まったく、いい年してなんにも知らないんだから」

④母はうつむいて、ちらりと私を見た。

「クリスマスつぼくていいじゃん。クリスマスが終わったら私が持つて帰るよ」

母をかばうように私は言った。おばあちゃんのcランボウなもの言いに私は慣れているのに、もっと長く娘をやっている母はなぜか慣れていないのだ。

案の定、その日の帰り、タクシーのなかで母は泣いた。 ⑤またもや私は、ひ、と思う。

「あの人は昔からそうなのよ。私のやることなすことすべてに⑥けちをつける。よかれと思ってやっていることがいつも氣にくわないの。私、何をしたらあの人にお礼を言われたことなんかないの」

タクシーのなかで泣く母は、⑦クラスメイトの女の子みたいだった。母の泣き声を聞いていると、⑧心がスポンジ状になって濁った水を吸い上げていくような気分になる。

あああ、と私は思った。これからどうなるんだろう？ 本は見つかるのか？ おばあちゃんは死んじゃうのか？ おかあさんとおばあちゃんは今仲良くなるのか？ なんにもわからなかった。だって私は十四歳だったのだ。

クリスマスを待たずして、おばあちゃんは今個室に移された。点滴の数が増え、酸素マスクをはめられた。それでも私はまだ、おばあちゃんが死んでしまうなんて信じられないでいた。病室では笑っている⑨母は、家に帰ると毎日のように泣いた。おばあちゃんが個室に移されたのは、私が鉢植えを持っていたからだと言って泣いた。

その年のクリスマスは冷え冷えとしていた。私が夏から楽しみにしている母のローストチキンは黒こげで食べられたものではなかったし、ケーキに至っては砂糖の量を間違えたのかまったく甘くなかった。クリスマスプレゼントのことはみんな忘れているようで、私は何ももらえなかった。

そうして例の本も、私は見つけられずにいた。

クリスマスプレゼントにできたらいいと思って、私はさらに遠出をして本屋めぐりをしていたのだが、そのなかの一軒で、年老いた店主

が、たぶんd絶版になっていると教えてくれた。昭和のはじめに活躍した画家の書いた、エッセイだということも教えてくれた。それで、それまで入ったこともなかった古本屋にも、足を踏み入れていたというのに。

⑩黒こげチキンの次の日、冬休みに入っていた私は朝早くから病院にいった。見つけれなかった本のかわりに、黒いくまのぬいぐるみを持っていた。

「おばあちゃん、ごめん、今古本屋さがしてる。かわりに、これ」

おばあちゃんはずいぶん痩せてしまった腕でプレゼントのe包装をとき、酸素マスクを片手で外してずけずけと言う。

「まったくあんたは子どもだね。ぬいぐるみなんかもらったつてしょうがないよ」

これにはさすがにかちんときて、個室なのをいいことに、⑪私は怒鳴り散らした。

「おばあちゃん、わがまますぎるつ。ありがとうくらい言えないのつ。私だつて毎日日本屋歩いてるんだから。古本屋だつて、入りづらいのがんばつて入ってるんだから。古本屋に私みたいな若い子なんかないのに、それでも入つてつて、愛想の悪いおやじにメモ見せて、がんばつてさがしてるんだからつ。それにっ、おかあさんにポインセチアのお礼だつて言いなよっ」

おばあちゃんは目玉をぱちくりさせて私を見ていたが、突然笑い出した。私の覚えているよりは数倍弱々しい笑いではあったけれど、それでもすぐくA笑った。

「あんたも言うときは言うんだねえ。なんだかみんな、やけにやさしいんだもん、調子くるつてたの。美穂子なんかあたしが何か言うとも⑫目くじらたてて言い返してきたくせに、やけに素直になっちゃつて」

美穂子というのは私の母である。外した酸素マスクをあごにあてて、おばあちゃんは窓の外を見て、ちいさな声で言った。

「⑬あたし、もうそろそろいくんだよ。それはそれでいいんだ。これだけ生きられればもう充分。けど⑭氣にくわないのは、みんな、美穂子も菜穂子も沙知穂も、人がかわつたようにあたしにやさしくするつてこと。ねえ、いがみあつてたら最後の日まで人はいがみあつてたほうがいいんだ、許せないところがあつたら最後まで許すべきじゃないんだ、だつてそれがその人とその人の関係だろう。相手が死のうが何しうが、むかつくことはむかつくつて言つたほうがいいんだ」

おばあちゃんはそう言つて、酸素マスクを口にあてた。くまのぬいぐるみを、自分の隣に寝かせて、目を閉じた。くまと並んで眠るおばあちゃんは、おさない子どもみたいに見えた。

おばあちゃんは、翌年になってから死んだ。眠るように死んだ。⑮クリスマスからずつと隣に寝かせていたぬいぐるみは、おばあちゃんの棺のなかに入れられた。おばあちゃんといつしよに煙になって空にのぼつていった。

そうして私は、ついに本を見つけることができなかったのだ。

お通夜の夜も、告別式の日も、⑯私は泣かなかつた。おばあちゃんが死んでしまつてさえ、死んだなんて信じられなかつたのだ。親戚のだけれかが、泣かない私を見て何か言つていたのは知っている。あんなに毎日病院にいつていたのに、涙ひとつこぼさないなんて、強い子だとか何とか。

私は強くなかない。ただおばあちゃんが死んだことを信じていないだけだ。だつて、私はまだあの本を見つけていないんだから。私が見つけなきや、死ぬに死にきれないつておばあちゃんは言つていたんだから。

それで、その後も私はあの本をさがし続けた。学校が終わると、電車に乗つて知らない町を目指して、降りたことのない駅で降りて本屋か古本屋をさがす。おかげでB友達が少なくなつてしまった。部活も入っていないし、放課後のおしゃべりにも加わらないから。けれど、さがすのをやめるわけにはいかなかった。

本は見つからないまま、私は中学三年生に進級した。

春の夜だった。私の部屋の窓からは、通りに植えられた桜がほんの少しだけ見える。街灯に照らされて、花びらは白くしんと動かない。受験勉強に飽きて夜の桜を見るときもなく眺めていると、肩を叩かれた。びっくりしてふりむくと、おばあちゃんが立っているのもつと驚いた。ぎよえ、と声を出してしまつたくらいだ。

「ぎよえ、じゃないよまつたく。本はどうなつたのさ」

おばあちゃんはいかわらずの口調で言つた。棺のなかで着ていた白い着物ではなくて、私がちいさいころによく着ていた、深緑の着物を着ていた。驚きのあまりなんにも言えない私をのぞきこんで、⑰おばあちゃんはやにやと笑う。

「言つただろ、見つけなければ化けて出るつて。見つかつたのかい」

私は首を横にふつた。おばあちゃんのため息をつき、私のベッドに腰掛けた。ベッドに腰掛ける幽霊。

二〇二三年度 樟蔭中学校 入学試験 問題用紙（A入試） 【国語】

二〇二三年一月十四日 実施 解答は解答用紙に記入すること。 「五枚のうち その三」

「おばあちゃん、けど、なんでその本をそんなに一生懸命さがしているの」

私は言った。

「なんでって、読みたいからさ。それだけだよ」

「おばあちゃん、幽霊になったらあちこち移動できるんでしょ、自分でさがしたらどうかな」

ふつうに会話ができると、驚きも恐怖心もみるみるうちにしぼんだ。幽霊がこわいのはきつと知らない人だからだ。見知った人なら、幽霊だって妖怪だってこわくないものらしい。

「あのね、なんであたしが幽霊になってまで本屋にいつて棚をのぞかなきゃなんないの。そういう七面倒なことは、生きている人間のやることだよ」

「そりゃそうかもしれないけど……」

おばあちゃんはベッドに腰掛けて窓の外をじっと眺めていた。

《おばあちゃんは、私が高校三年生になって、受験勉強を始めるころからあらわれなくなった。高校の三年間はいろいろなことがあったが、そのなかでも一番私にとって大きな事件だったのは、父と母が別れたことだった》

新しい年がまたやってきて、その冬の終わり、私は志望大学に合格した。おばあちゃんはいかわらずあられせず、私は本さがしをするころもなく、母も私も二人きりの暮らしに慣れはじめていた。おばあちゃんは記憶のなかにゆつくりと沈殿ちんでんしていった。

大学三年生のときだった。ゼミのための教材をさがしに入った大学の近くの本屋で、ちいさく名前を呼ばれたような気がした。私は足を止め、ふりかえる。本屋のなかには数人の学生が棚を物色しているが、見知った顔はない。気のせいかと視線を戻しかけたとき、平積みになれた本の表紙が目飛びこんできた。

そこに記されたタイトルと著者名が、かつて私が何日も何日もさがし続けていたものだ気づくまで、数秒かかった。

「あつ」

メモに書かれたおばあちゃんの字と、その書名が頭のなかでぴたり重なり合ったとき、私は思わず声を出していた。本を手にとる。まじまじと表紙を見る。

「幻のエッセイ、ついに復刊」と、帯にあった。奥付を見ると、親本の初版は昭和二十五年とある。それが今年になって復刊の運びとなったらしかった。

「これだよ」

⑱私は本を胸に抱いて顔を上げ、書店じゅうを見まわした。おばあちゃんがまたあらわれるのではないかと思ったのだ。今ごろ見つけたのだ。まったくあんたは愚図ぐずなんだから。そんな憎まれ口をききながら。

けれど、午後の日がさしこむ本屋に幽霊はいなかった。あらわれる気配もなかった。まじめそうな学生がたくさんの本を抱えてレジに向かい、手をつないだカップルが新刊コーナーをのぞきこみ、奇抜な格好をした女子学生が芸術書の棚を眺めている。ガラス窓の外には、いつもと変わらない日常が陽にさらされて進行している。

問一 二重傍線部 a～e について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに直して書け。

問二 傍線部①「おばあちゃんのさがす本」について、具体的にはどのような本か。本文中から二十二字で抜き出し、最初の五字を書け。

問三 傍線部②「何か意地悪をしているような気持ちになってくる」について、「私」はなぜこのように考えたのか。後の記号から選べ。

ア おばあちゃんが悲しんでいるのは、自分がわざと本を見つけださないでおこうと考えたことが原因だと思ったから。

イ おばあちゃんが怒っているのは、いつも持つてくるおみやげがなかったことが原因だと思ったから。

ウ おばあちゃんが落ち込んでいるのは、頼まれた本を持つてこなかったことが原因だと思ったから。

エ おばあちゃんが意地悪なのは、探している本が見つからないというストレスが原因だと思ったから。

問四 傍線部③「私の考え」について、これはどのような考えか。これより前の文章から連続した二文で抜き出し、最初の五字を書け。

問五 傍線部④「母はうつむいて、ちらりと私を見た」について、なぜこのような行動をとったのか。その理由を四十字以内で説明せよ。

二〇二三年一月十四日 実施 解答は解答用紙に記入すること。〔五枚のうち その四〕

問六 傍線部⑤「またもや私は、ひ、と思う」について、このときの私の心情として適当なものを、後の記号から選べ。

- ア 母の情けない姿を目にしたことによって、自分がすっかりしなけなければいけなくなったことに対して怒っている。
イ 母が泣きながら不満を言う姿を見て、クラスメイトの女の子のように頼りない印象を持ち、うんざりしている。
ウ 今まで泣いたところを見たことのない、母親の泣く姿を見て、いつもと異なる光景に強い恐怖をおぼえている。
エ いつも自分を泣かせている母親がおばあちゃんに泣かされている姿をみて、ざまあみろとゆかいに思っている。

問七 傍線部⑦「クラスメイトの女の子みたいだった」について、ここに使われている表現技法を後の記号の中から選べ。

- ア 直喩 イ 擬人法 ウ 体言止め エ 倒置法

問八 傍線部⑧「心がスポンジ状になって濁った水を吸い上げていく」について、これは具体的にどのようなことを指すか。適当なものを後の記号から選べ。

- ア 自分のことしか考えずに泣く母に対して、やる気をうしなってしまうているということ。
イ 隣で母が泣いているため、なんとなく自分が泣かせたように感じてしまうということ。
ウ めめめそと情けなく泣いている母が、自分が嫌いなクラスメイトと同じように見えること。
エ 次から次へといやなことが起こり、それが自分の中で重なってしまっているということ。

問九 傍線部⑨「母は、家に帰ると毎日のように泣いた」について、なぜ母は泣いていたのか。理由として適当なものを後の記号から選べ。

- ア 自分が持ってきた鉢のせいで、おばあちゃんの病気が重くなったと思っているから。
イ おばあちゃんが自分にばかり頼みごとをしてくることを、悲しく思っているから。
ウ おばあちゃんがけがをして入院しているのは、すべて自分のせいだと考えているから。
エ おばあちゃんに呪われた鉢を持ってきたことが原因だとわかっていたから。

問十 傍線部⑩「黒こげチキンの次の日」とあるが、これは具体的に何月何日を指すか。漢数字を使って答えよ。

- 問十一 傍線部⑪「私は怒鳴り散らした」について、なぜ私は怒鳴り散らしたのか。理由として適当なものを後の記号から選べ。
ア おばあちゃんに対する好意を、ことごとく理解しないおばあちゃんの態度にかちんときたから。
イ ぬいぐるみを選んだ自分のセンスをばかにしたおばあちゃんの態度にかちんときたから。
ウ いつまでも本が見つからないことを根に持っているおばあちゃんの態度にかちんときたから。
エ もう中学生なのに、いつまでたっても子ども扱いをしてくるおばあちゃんの態度にかちんときたから。

問十二 空欄A・Bに当てはまる言葉を、後の記号からそれぞれ選べ。

- | | | | | |
|---|---------|----------|----------|------------|
| A | ア 泣きながら | イ いらいらして | ウ おかしそうに | エ めんどくさそうに |
| B | ア ぴったり | イ めっきり | ウ ぽっかり | エ ばったり |

問十三 傍線部⑥「けちをつける」、傍線部⑫「目くじらたてて」の意味として適当なものを、後の記号から選べ。

⑥「けちをつける」

- ア 何度も同じことをくり返す
イ おもしろがって調子に乗る
ウ おもいつきり怒鳴りつける
エ いやなことを言ったりしたりする

⑫「目くじらたてて」

- ア 悲しそうに泣きながら
イ 小さな欠点を探してとがめて
ウ うその理由をでっちあげて
エ 関係のないことを話題にして

問十四 傍線部⑬「あたし、もうそろそろいくんだよ」について、これは具体的にどのようなことを指すか。二十字以内で説明せよ。

問十五 傍線部⑭「氣にくわないのは」について、後の問いに答えよ。

① おばあちゃんは何が「氣にくわない」のか。適当なものを後の記号から選べ。

ア 自分が病気になったことで、みんなが、人がかわったように自分にやさしくすること。

イ 今までさんざんけんかしてきた美穂子が、今では会話すらしてくれなくなかったこと。

ウ もともと仲の悪かった菜穂子や沙知穂が、自分が病気になっても会いに来てくれないこと。

エ 今まで素直に自分の言うとおりにしてきた「私」が、突然怒って反抗してきたこと。

② おばあちゃんはなぜ「氣にくわない」と考えているのか。その理由として適当なものを後の記号から選べ。

ア 最後までけんかをするのではなく、許しあうことが大切だと考えているから。

イ 最後は互いに気持ちよく過ごすことが、その人との関係だと考えているから。

ウ 最後まで、今までと同じように接することが、その人との関係だと考えているから。

エ 人と人との関係の中では、自分の思いをつらぬくことが重要だと考えているから。

問十六 傍線部⑮「クリスマスからずっと隣に寝かせていたぬいぐるみは」について、「ずっと」が修飾している（かかっている）部分として正しいものを、後の記号から選べ。

㊦ クリスマスから ずっと ㊩ 隣に ㊪ 寝かせていた ㊫ ぬいぐるみは

問十七 傍線部⑯「私は泣かなかった」について、その理由を解答欄に当てはまるように十字以内で答えよ。

問十八 傍線部⑰「おばあちゃんはやにやと笑う」について、このときのおばあちゃんの気持ちとして適当なものを、後の記号から選べ。

ア 死んだはずの自分があらわれておどろく私を見て、おもしろがっている。

イ 死んだはずの自分があらわれてこわがる私を見て、怒ろうとしている。

ウ 突然あらわれた自分にもびつくりしていない私に対して、感心している。

エ いきなり声をかけてしまったことに対して、申し訳なく思っている。

問十九 傍線部⑱「私は本を胸に抱いて」について、このときの私の気持ちを「おばあちゃん」「本」という言葉を用いて、四十字以内で説明せよ。

二. 後の問いに答えよ。

問一 次の空欄に当てはまる生き物の名前を、後の記号からそれぞれ選べ。

① ☐の耳に念仏

② ☐も歩けば棒に当たる

③ ☐の手も借りたい

④ 一寸の☐にも五分の魂

⑤ ☐心あれば水心

ア 牛 イ 虫 ウ 蛇 エ 鳥 オ 犬

カ 猫 キ 魚 ク 馬 ケ さる コ ねずみ

問二 次の漢字の部首を後の記号からそれぞれ選べ。

① 札 ② 祝 ③ 点 ④ 複 ⑤ 困

ア ころもへん イ こざとへん ウ てへん エ きへん オ くになまえ

カ れんが（れつか） キ しめすへん ク まだれ ケ おおざと コ うかんむり

問三 次の傍線部の漢字について、あっているものには○を、間違っているものには漢字を直して書け。

① 対性的な意見が出てきた。

② 危険な場所に近づかないようにする。

③ シュークリームの専門店。

④ 国語の教科書にのっている例文。

⑤ 親考行をこころがける。